

ひょうご 水百景

No.2-1 住吉川（神戸市東灘区）

～文豪・谷崎潤一郎の小説『細雪』が語る阪神大水害～



写真-1 新落合橋から住吉川上流を撮影（令和元年10月）

■ 住吉川兩岸に設けられた「ダンプ道」、今は「清流の道」

上の写真-1は、新落合橋から花崗岩の切石で築かれた落差工が連続する急勾配の住吉川を撮ったものです。前方に見える緑色の屋根の建物は、白鶴酒造創業家7代目当主・嘉納治兵衛の収集品を展示するため、自らの古希を記念して昭和9（1934）年に開館させた白鶴美術館です。

また、兩岸に設けられた河中道路は、今でこそ「清流の道」と呼ばれていますが、昭和37（1962）年12月1日に完成したダンプ専用道路（写真-2：通称「ダンプ道」）で、渦森山を削って臨海部を埋め立てるとき、土砂を運ぶダンプカーが街中を何度も往復するのを避けるために整備された工事用道路です。昭和43（1968）年度までダンプが走っていましたが、工事終了後は立ち入り禁止となっていました。その後、地元からの強い要望があって昭和49（1974）年に開放され、以来ジョギングや散歩など多くの市民に利用されています。

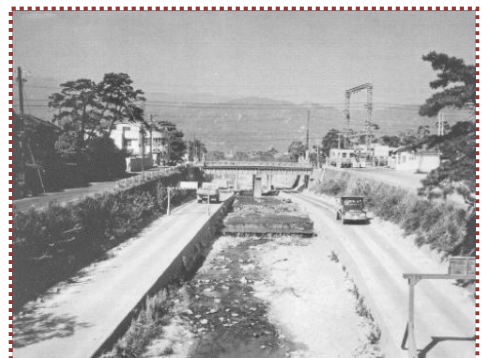


写真-2 阪神電鉄橋梁下を通るダンプトラック（昭和37年）（『住吉川アルバム』から引用）

■ 反高林が「日本一の長者村」に

江戸時代、六甲山から流れ出てきた花崗岩礫などが多い住吉川河畔には、水害防備林として荒れ地に強い松が植えられ、河口近くまで松林が続いていたそうです（写真-3）。地味の痩せた河畔の農地は、農作物の収穫が期待できないため、軽い年貢しかかけられませんでした。こうした土地を「反高場（たんたかば）」といい、そこが松林であったため「反高林（たんたかりん）」と呼ばれていました。現在では、河畔にわずかばかりの松林が残るのみです。

このように高燥な土地であった住吉村に、明治7（1874）年鉄道敷設と同時に住吉駅（現・JR住吉駅）が開業します。



写真-3 住吉川と反高林 (『住吉川アルバム』から引用)



水の溜れた住吉川
(昭和初期)

写真-4 水の溜れた住吉川 (『住吉川アルバム』から引用・加工)

明治時代後期になると、大阪への交通の便が良く、眺望に恵まれ、神戸港へも近いという優れた環境に富裕層が着目し、住吉川沿川は郊外型高級住宅地として発展していきます。

明治 33 (1900) 年頃、朝日新聞の創業者の一人、村山龍平が数千坪の土地を取得します。船場の商人たちは「正気を失ったのではないかと」啞然としたそうですが、村山はここに豪邸を建て、その地は現在香雪美術館になっています。これが郊外住宅地の黎明ともいわれています。

村山に続いて住友銀行 (現・三井住友銀行) 初代頭取の田辺貞吉、住友家総理事の鈴木馬左也も広大な土地を取得。さらに明治 40 (1907) 年頃に阿部元太郎が住吉川沿いの観音林、反高林の土地を開発、宅地分譲を行い、東洋紡績 (現・東洋紡) の社長となる阿部房次郎が取得しています。その後も住友本邸、大日本紡績 (現・ユニチカ) 社長の小寺源吾邸、鐘紡社長の武藤山治邸、日本生命創設者の弘世助三郎邸、野村財閥の野村徳七邸、大林組社長の大林義雄邸、鉱山王で久原 (くはら) 財閥総帥の久原房之助邸、武田薬品工業創業者の武田長兵衛邸、乾汽船社長の乾豊彦邸、岩井商店 (現・双日) 主の岩井勝次郎邸、甲南学園創立者の平生鈆三郎 (ひらおはちぶろう) 邸などが建ち、住吉村は「日本一の長者村」の名をほしいままに。明治 44 (1911) 年には甲南幼稚園が開園し、やがて平生鈆三郎の尽力もあって甲南学園へと発展していきます。平生は病院の必要性も感じ甲南病院を開院しています。住吉は今なお関西屈指の人気の住宅地ですが、その基盤はこの頃に先人たちによって築かれたものです。

■ 「日本一の長者村」を流れる住吉川では洪水による被害が頻発していた

明治時代初期の住吉川は二重堤防で、川幅が旧西国街道 (現・国道 2 号) 付近で 50 間 (≒91m) もあったそうで、川底が周辺より高い、いわゆる天井川でした。災害の度に堤防の修繕や簡単な石垣の築造、橋梁の架け替えが行われていましたが、大水害には対処することができそうになく、抜本的な対策を望む声が高くなってきました。

そこで「日本一の長者村」で財政的に豊かな住吉村は、大正元 (1912) 年 10 月 12 日、「護岸工事及び道路新設願」を知事に願い出て許可を受け、大正 2 (1913) 年 8 月 26 日から昭和 3 (1928) 年 3 月 3 日の工期で観音林から反高林に至る住吉川右岸の護岸工事を実施します。

さらに、大正 6 (1917) 年 6 月、魚崎町・住吉村・本山村は住吉川改修事務組合を設立し、共同で住吉川の改修を行うこととします。大正 7 (1918) 年 7 月には延長 1,530m 区間の拡幅並びに河床勾配の緩和を主眼とする改修を知事に願い出て許可を受け、同年 8 月から工事に着手、大正 9 (1920) 年竣工しています。その後も災害は頻発し、昭和 10 (1935) 年には 4 度に及ぶ豪雨のため、住吉川は土砂で埋没し交通が途絶しました。この災害を契機に、住吉川は同年 9 月 30 日告示第 784 号をもって旧河川法に基づく準用河川に認定されました。

■ 谷崎潤一郎の小説『細雪』にみる阪神大水害

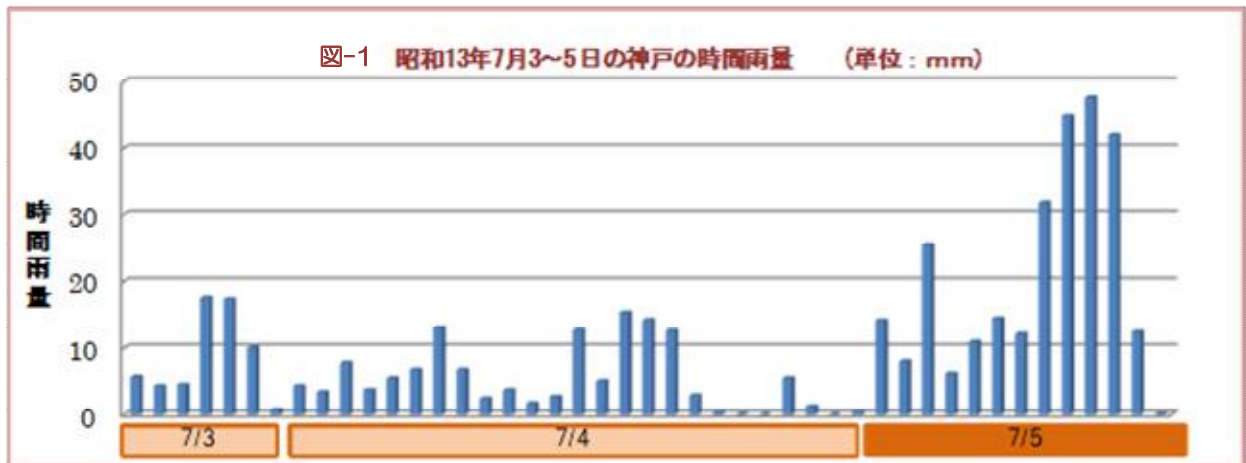
「…七月五日の朝の事であった。いったい今年は五月時分から例年よりも降雨量が多く、入梅になってからはずっと降り続けてみて、七月に這入ってからも、三日に又しても降り始めて四日も終日降り暮らしてゐたのであるが、五日の明け方からは俄かに沛然 (はいぜん) たる豪雨となっていつ止むとも見えぬ気色であった。が、それが十二時間の後に、阪神間にあの記録的な悲惨事をもたらした大水害を起さうとは誰にも考へ及ばなかつた…」

これは、谷崎潤一郎が昭和 11 (1936) 年秋から昭和 16 (1941) 年春までの大阪の旧家を舞台に、4 姉妹の日常生活の明暗を綴った長編小説『細雪』の一節です。



写真-5 倚松庵

昭和 13 (1938) 年 7 月 5 日に発生した阪神大水害は、前述のように前期降雨が多くて (図-1)、六甲山系の風化花崗岩が雨水をいっぱいを含んですでに飽和状態にあったところに 3 時間連続で時間雨量 40mm を超える大雨が降り、大規模な「山津波」が発生したのです。



住吉川では、5 日の午前 9 時半頃に山津波が発生しました。西谷山が崩れ、崩れ落ちた土石や樹木が濁流と共に押し流されてきて、阪急電鉄神戸線の住吉川橋梁 (鉄橋) に引っかかり、これらが川の流れを堰き止め周辺に溢れ出ました。濁流は、住吉川橋梁や千苅水源地からの大送水管を破壊するとともに、家々の塀を押し倒し、あっという間に住吉村一帯を飲み込んでしまいました。

山津波の勢いや量は想像を絶するもので、その様子を谷崎は「雄大とか豪壮とか云う言葉を使ふのは此の場合に不似合いのやうだけれども、事実、最初に来た感じは、物凄いと云うよりはさう云う方に近く、驚くよりは茫然と見惚れてしまった。いったいこの辺は、六甲山系の裾が大阪湾の方へゆるやかな勾配を以て降りつゝある南向きの斜面に、田園があり、松林があり、小川があり、その間に古風な農家や赤い屋根の洋館が点綴 (てんてつ) してみると云った風な所で、彼の持論に従へば、阪神間でも高燥な、景色の明るい、散歩に快適な地域なのであるが、それがちょうど揚子江や黄河の大洪水を想像させる風貌に変わってしまっている。そして普通の洪水と違ふのは、六甲の山奥から溢れ出した山津波なので、真っ白な波頭を立てた怒涛が飛沫を上げながら後から後からと押し寄せて来つゝあって、恰も全体が沸々と煮えくり返る湯のやうに見える。たしかに此の波の立ったところは川ではなくて海 — どす黒く濁った、土用波が寄せる時の泥海である。貞之助の立ってある鉄道の線路は、その泥海の中へ埠頭の如く伸びてゐて、もう直き沈没しそうに水面とすれすれになってゐるところもあり、地盤の土が洗ひ去られて、枕木とレールだけが梯子のやうに浮かび上がってゐるところもある。」と描写しています。



写真-6 甲南小学校の北東隅の『細雪』石碑

そして、雨があがると「…たとえば住吉川の上流、白鶴美術館から野村邸に至るあたりの、数十丈の深さの谷が土砂と巨岩のために跡形もなく埋ってしまったこと、国道の住吉川に架した橋の上には、数百貫もある大きな石と、皮が擦り剥けて丸太のようになった大木とが、累々と積み重なって交通を阻害していること、…」と表現されています。もっと悲惨な光景の描写もありますが、平成 23 (2011) 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災における大津波の光景とあまりにもダブってしまうので掲載は差し控えます。

次頁に、神戸市のホームページから住吉川における阪神大水害の写真-7~12 を引用しているのでご覧ください。

筆者には、巨匠の文章よりも押し流されてきた巨石の写真の方がより迫ってくるものがあります。

谷崎潤一郎は、昭和 11 (1936) 年秋に住吉村反高林 (現在の神戸市東灘区住吉東町 1 丁目) に移り住み、昭和 13 (1938) 年の阪神大水害を経験しました。谷崎が住んでいた「倚松庵」(写真-5) は、六甲ライナー建設により元の位置から約 120m 北に移築保存されています。また、甲南小学校北東隅には『細雪』と刻まれた石碑 (写真-6) があります。この石碑は、甲南小学校創立 75 周年を寿ぎ、名作「細雪」の著者・谷崎潤一郎の生誕百年を記念して、昭和 61 (1986) 年 11 月に甲南小学校が建てたもので、谷崎の書と、神戸生まれの洋画家・小磯良平作の雪の結晶模様が刻まれています。

写真-7 は野村財閥の野村徳七邸付近の状況ですが、うねる濁流の勢いが圧巻で、あちこちで飛沫が上がっています。写真-8 も同じ野村徳七邸付近の状況です。写真-9 は白鶴美術館下の状況です。美術館は何とか持ちこたえたようですが、数軒あった人家は跡形もなく、河原を巨礫が埋め尽くしています。写真-10 では、阪神国道・住吉橋の上を濁流が洗っています。写真-11 も同じく住吉橋ですが、流されてきた巨石が橋の上流を埋め尽くしています。写真-12 では、住吉橋の仮橋ができ、巨石を移動させて流れを元の流路に戻しています。



写真-7 野村邸付近から見た奔流 (7/6) (神戸市HPから引用)



写真-8 危険な状態の野村邸北部川岸 (神戸市HPから引用)

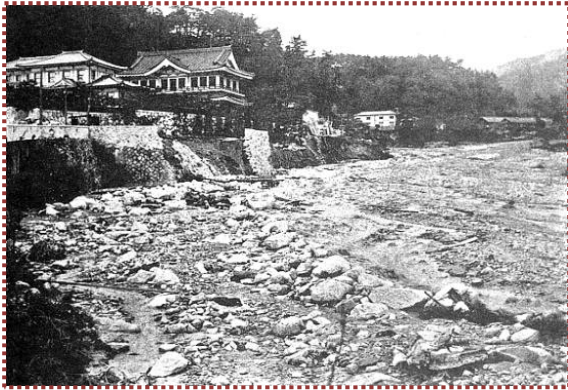


写真-9 白鶴美術館下の住吉川 (神戸市HPから引用)



写真-10 阪神国道・住吉橋付近の惨状 (神戸市HPから引用)



写真-11 惨憺たる阪神国道・住吉橋付近 (神戸市HPから引用)

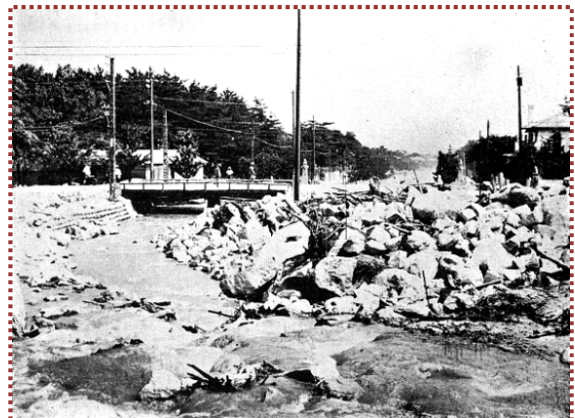


写真-12 漸く本流へ復した流れと住吉橋・仮橋 (神戸市HPから引用)

住吉川の被害状況を見ると、西谷川合流点の下流付近から阪急電鉄の下流周辺までの被害は甚大で、樹木や家屋は上流から流されてきた土石に埋もれてしまっています。阪急電鉄の線路上に堆積した土砂は厚さ3m近くに及び、押し流されてきた岩石は大きなもので1.5m角のものもあったとか。12~15cmほどの石が最も多く、周辺は岩石、小石、土砂が大量に堆積し、中には家屋の鴨居にまで達するような場所もあったとか。

阪急電鉄の下流では、住吉川本来の流路は土砂で埋まり、阪神国道までの間には大きな岩石が散乱し、一方、国道より南は、上流の決壊によって水流が減少したため、大量の土砂のみが堆積しました。

国鉄～阪神国道付近は、阪急電鉄付近で堰き止められた住吉川の流れが東西に流れ出し、東の天上川から溢れ出た水も合流して、住吉から魚崎、青木(おうぎ)一帯に濁流が溢れ、扇状に被災地域が広がりました。

■ 谷崎潤一郎は阪神大水害をどのようにして取材したのか

谷崎は『細雪』における阪神大水害の状況の叙述について、『谷崎潤一郎全集・第20巻』に所収の「細雪回顧」で以下のように述べています。

「関西の風水害の時の叙述でも、水の出た時間などは正確でない。それからあの出水の箇処に書いたことを私の実際の経験であるやうに誤信してゐる人もあるやうに聞か、私のみたところは絶対安全なところで、実は私は少しも恐い思ひはしてゐないのだ。水が出た二三時間後に近所を歩いてみた見聞と、あの辺で実際に水害に遭った学校の生徒の作文をあとで沢山見せてもらったので、それが参考になってゐる程度である」

谷崎の居宅「倚松庵」(写真-5)は阪神電鉄魚崎駅の少し北の住吉川右岸にありましたが、「住吉川流域水害図」(図-2)を見ると、山津波は阪急電鉄橋梁や国鉄東海道本線、阪神国道の住吉橋で堰き止められたため勢いが削がれるとともに東西方向に広がったので、谷崎の居宅周辺は思ひのほか影響が少なかったようです。

ということで、谷崎は山津波の雰囲気は感じ取ったと思いますが、「真っ白な波頭を立てた怒濤が飛沫を上げながら後から後からと押し寄せて」くる山津波を目視したわけではないようです。

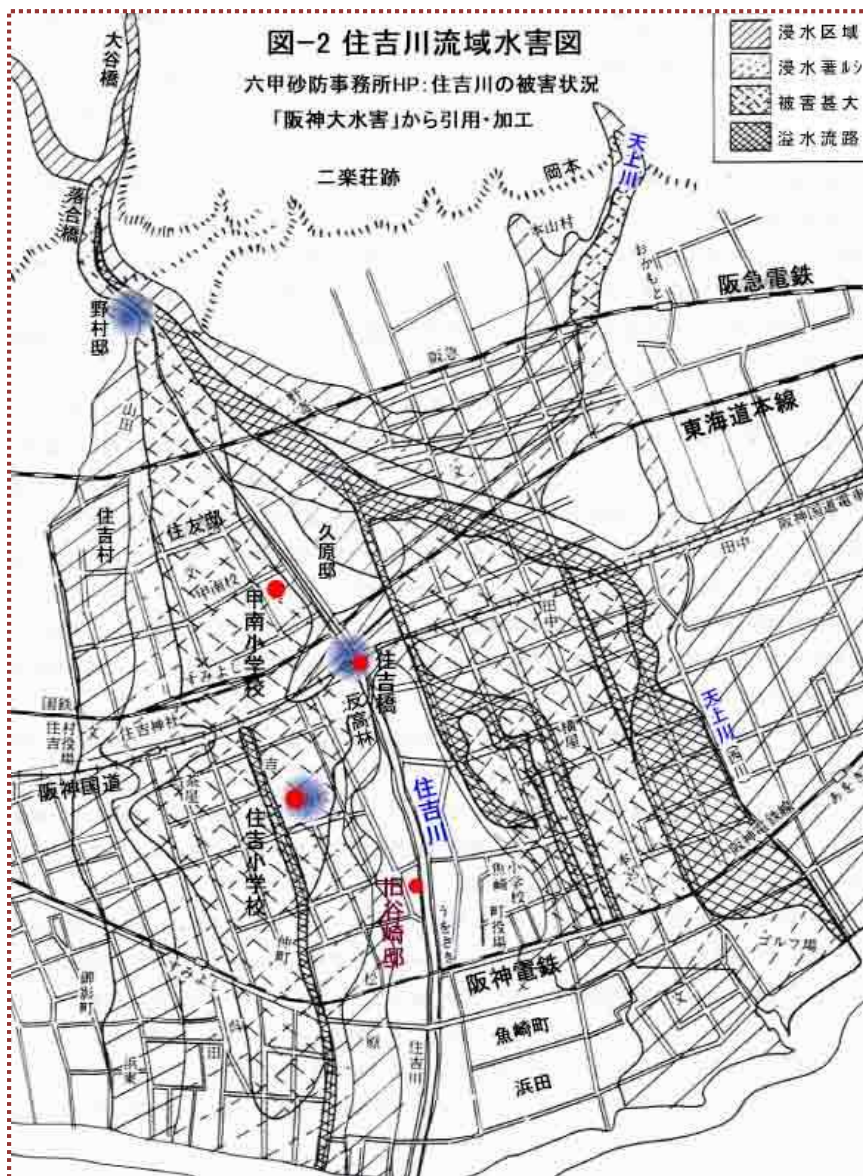
災害発生時、多くの人が「今の状況を自分の目で確認したい」と思い危険な場所へ足を運びがちで、ましてや小説家であれば目に飛び込んできた映像を文章にする能力に長けているのでなおのことです。

しかし、特に川や用水路などの水辺は非常に危険な場所です。雨量が急増し、川や用水路の水位が短時間で急激に上昇します。見に行った時点では平穏に見えても、数分後に一気に増水・氾濫が発生し、一瞬で危険な状況になる恐れがあります。雨で地盤が緩んでいるため、川の堤防や道路が崩れやすく、決壊した場合、巻き込まれるリスクが高くなります。自分自身が事故に遭い助けを呼ぶ必要が生じれば、救助隊や地域の人々の負担が増え、二次的な被害を広げてしまうことになります。

近年の豪雨災害でも、増水した河川や田んぼの様子を見に行った人が流されて亡くなるケースが全国で多数報告されています。

災害時に川や用水路の様子を見に行く行動は、自ら命の危険を高める非常に危険なNG行動です。命を守るため、発災時には谷崎潤一郎を見習って決して「見に行かず」、安全な場所で情報を待ち、避難指示があれば速やかに行動してください。二次災害を防ぐためにも、自分自身の安全を最優先に考えましょう。

ところで気になるのは、谷崎が参考にしたという「水害に遭った学校の生徒の作文」ですが、どこの学校なのでしょう。神戸市立中央図書館の2階・郷土史コーナーに、甲南高等学校発行の『阪神地方水害記念帳』や甲南尋常小学校発行の『甲南小学校水災記念誌』、甲南高等学校発行の『昭和13年7月5日の阪神水害記念帳』などがあって読んでみましたが、なかなかしっかりした文章を書いていてビックリしました。



■ モノローグ

阪神大水害当時は「土石流」という言葉がなかったため、「山津波」という言葉が使われていますが、この方が土石流のすごさが伝わってくるように思います。巨石が流れ下るといより、山ごと流れ出してくるような感覚だったのでしょうか。それにしても、1.5m ほどの大きさの巨石を押し流す水の力には、浮力が働いているとはいえただただ驚くばかりです。

被災地に置き去りにされた巨石の一部は、石碑や豪邸の地上げのために築かれた石垣に利用されてはいるものの、それ以外は処分しなければなりません。都賀川では、臨海部の埋め立てに流用されたと記憶していますが、住吉川では…。

アカバナフヨウ（赤花芙蓉）

アオイ科フヨウ属の落葉低木。「ふよう」と「アメリカふよう」との種間交雑種で、大阪市立大学附属植物園の立花吉茂氏によって作出された。開花期が長く、真っ赤な花を夏から晩秋まで咲かせる。葉柄や花柄も赤褐色をしているのが特徴。ただし、両親の染色体数が異なるため不稔性（花が咲いても種子ができない）だそう。10月上旬、オーキッドコート前の住吉川中州に咲いていた。



写真-13 住吉川中州に咲いていたアカバナフヨウ

【参考文献】

- 1 『谷崎潤一郎全集・第十九巻「細雪・上巻」』 谷崎潤一郎 平成 27 年 6 月
- 2 『谷崎潤一郎全集・第二十巻「細雪回顧」』 谷崎潤一郎 平成 27 年 7 月
- 3 『東灘区の清流 住吉川～住吉川清流の道』 神戸市 HP
<https://www.city.kobe.lg.jp/b07715/kuyakusho/higashinadaku/shoukai/shoukai/seiryu.html>
- 4 『住吉川アルバム』 豊かな森川海を育てる会 平成 25 年 11 月
- 5 『神戸っ子アーカイブ あの時の神戸』 月刊神戸っ子 平成 27 年 11 月号
- 6 『六甲三十年史』 建設省近畿地方建設局六甲砂防工事事務所 昭和 49 年 3 月
- 7 『阪神大水害デジタルアーカイブ写真』 神戸市 HP <https://www.city.kobe.lg.jp/a47946/hanshindaisuigai.html>
- 8 『1938 年（昭和 13 年）阪神大水害』 神戸市 HP 令和 7 年 10 月更新
https://www.city.kobe.lg.jp/a44881/bosai/disaster/flood01/flood03/O1_s13daisuigai/index.html
- 9 『六甲山の災害史～住吉川の被害状況【阪神大水害】』 六甲砂防事務所 HP
<https://www.kkr.mlit.go.jp/rokko/disaster/history/s13/sumiyoshi.php#top>
- 10 『谷崎潤一郎「細雪」を歩く』 東京紅団 HP 平成 30 年 6 月最終更新
<https://www.tokyo-kurenaidan.com/tanizaki-sasameyuki-3.htm>
- 11 『アカバナフヨウ（赤花芙蓉）』 ポタニックガーデン 令和 7 年 10 月
<https://www.botanic.jp/plants-aa/akafuy.htm>
- 12 『白鶴美術館、細雪』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 23（2011）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.2

改訂：令和 8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.2-1